社団法人私立大学情報教育協会

平成21年度第1回CCCコミュニケーション関係学運営委員会議事概要

Ⅰ．日　　時：　平成21年7月17日(金)午後5時～7時

Ⅱ．場　　所：　私情協事務局会議室

Ⅲ．出　席　者：　北根委員、阿部委員、中西委員

事務局：　井端事務局長、森下主幹、山野上係長

Ⅳ．検討事項：

１．本事業の進め方について

事務局長より、本事業の進め方および中教審での学士課程教育に関する動向や関連事情等について次のように説明があった。当協会はITを活用した教育を推進する団体であるが、IT導入の事例紹介だけでは、多くの教員に共感を持っていただけない。IT導入に説得力を持たせるためには、授業のシナリオが重要であり、そのためには、授業の目標、すなわち、学生がその学部を卒業する時点でどの程度の能力を身に付けているかが問題となる。

中教審では、学士力として各大学に学士課程教育の内容を明言することを求めるとともに、将来的な分野別評価の実施を視野に入れて質保障の枠踏みづくりを促進するとしている。

中教審より学士力の内容について検討を付託された日本学術会議では、質保障の枠組みについて具体的な方法論を検討してきている。その参考として、QAAというイギリスの大学教員ネットワークによる学問分野別のベンチマークステートメントを 活用している。22年度までには10から15の分野で審議が行われるが、先日公開された心理学分野での学士力では、認定心理士の資格取得を目指す内容となっており、本来あるべき学士力とはかけ離れた内容となっている。

当協会では、サイバーFD研究員という多くの教員の声を反映できる体制があり、万機公論を尽くすためには当協会としても学士力をまとめて11月には提案を行いたいと考えている。その後にはIT活用の教育モデルや教員の教育力などまで言及していきたい。

２．コミュニケーション関係学に求められる学士力について

前項の方針に基づき、コミュニケーション関係学に求められる学士力内容について、検討を行うこととした。

(1) コミュニケーション関係学の学士力について

座長より、コミュニケーション学では学生募集の観点から学部名称の付け替えに終始しているようにも思えるとの指摘があった。学問分野としてのオーソドックスな内容をまず10点程度で挙げ、それを基に加除を行い、コミュニケーション学のスタンダードを提示してはどうかとの提案があり、検討を進めることとなった。検討の過程では、次のような意見があった。

- コミュニケーション学は学際的な性格の学問であり、どのような学問を勉強する際にも必要な内容である。
- ビジネス英語を例にしても、文化的背景を理解していないケースがありコミュニケーションに齟齬が生じるということがある。
- 比較文化と異文化コミュニケーションは異なる学問であることを認識することが必要である。比較文化は違いを見出すことで、異文化コミュニケーションはそれを踏まえた上でのコミュニケーションである。

- メディアがどのような性格を持っているのか知ることも重要である。メディアを介してきした情報をどう読み解くか、メディアを使った表現能力をどのように身に付けるかということも問題となる。
- そもそも日本語で「読み書き」ができない学生が多い。また、学んだことを日常生活の中で活かせなければ意味がない。
- たとえば数学科などでは学んだことが企業に入って役立つかという議論がある。しかし、説得力を持たせた交渉を行うには数的エビデンスがないと意味を成さないように、実用に十分役に立つ学問である。また統計学などは実用的であるし、学ぶ必要性を理解させることが重要である。
- イギリスでは、メディア教育の先進国であり、中学生の国語の授業でメディアをどう読み解くかというところまで含まれている。
- アメリカでは、コミュニケーションスキルとしてスピーチの授業を行っており、母国語でスピーチできることが重要とされている。日本ではコミュニケーションとなると外国語という考え方が根強くあり、英語教育が国際教育ではないということを理解させる必要がある。
- 某委員の授業では、プレゼンテーション、表現練習の授業している。ロールプレイによりコミュニケーションやネゴシエーションを行うなど、少しずつ始まっている。
- 英語科での授業のため英語でのコミュニケーションを主体に授業を行っているが、日本語科のコミュニケーションは日本語学の教員が小論文添削をする程度に留まっている。日本語教員にはコミュニケーション学のバックグラウンドがないという問題がある。
- 外国人相手のコミュニケーションと日本人同士のコミュニケーションは分けて考えたほうがよいのではないか。
- 人間関係を築く力が弱まっているのではないか。携帯電話が登場する以前はコミュニケーションをとることも努力していたが、現在は仲間うちだけの「選択的コミュニケーション」にとどまっている。
- コミュニケーション学の理論として、メディア史、コミュニケーション史などが挙げられる。過去、現在、未来を通したコミュニケーションのあり方を理解することが重要である。
- コミュニケーション研究のための社会調査論など、方法論について身につけていることが求められる。

以上の意見を踏まえ、コミュニケーション関係学をコミュニケーションのスキルと理論・概念に分け、それぞれの分野で必要な能力を書き出したところ次のようなものとなった。

- コミュニケーションスキル
  - 自分の言いたいことを表現できる。（発信力）
    - 対人表現
    - メディア表現
  - 相手のことを理解する。（受信力）
    - メディアから発信される情報を批判的に読み解くことができる。
    - 文化の違いを理解できる。
  - 組織における自分の果たすべき役割を理解できる（人間関係力）

- 理論、概念
  - 社会事象をコミュニケーション論的視点で理解できる。
  - コミュニケーションにおけるメディアの役割を理解できる。
  - 言語以外のコミュニケーションを理解できる。
  - 過去、現在、未来の時間軸の中でコミュニケーションを理解できる。
  - コミュニケーション研究のための方法論を理解できる。

３．今後の進め方

次回は、引き続き態度、志向性も含めた学士力詳細内容を検討するとともに、到達度測定やコアカリキュラムのイメージについて検討を行うこととなった。

なお、委員会開催日は追って日程調整することとなった（注：その後の調整で 9 月 4 日(金)午前 11 時より開催となった）。